身體檢査日割（毎々施行月日、人）は檢査開始の前日檢査場に掲示される。

身體檢査で不合格とされる者は概ね左の如くである。

一、身長一五一・五糎（五尺）に達せざる者

二、體重四五瓩（十二貫）（十七年未滿の者に在りては四三・一瓩）（十一貫五百匁）に達せざる者

三、胸圍七六・七糎（二尺五寸三分）（十七年未滿の者に在りては七五・二糎（二尺四寸八分）に達せざる者及胸廓擴張五・五糎（一寸八分）に達せざる者

四、身長體重及胸圍規定に適合するも著しく其の交互の對照を失する者

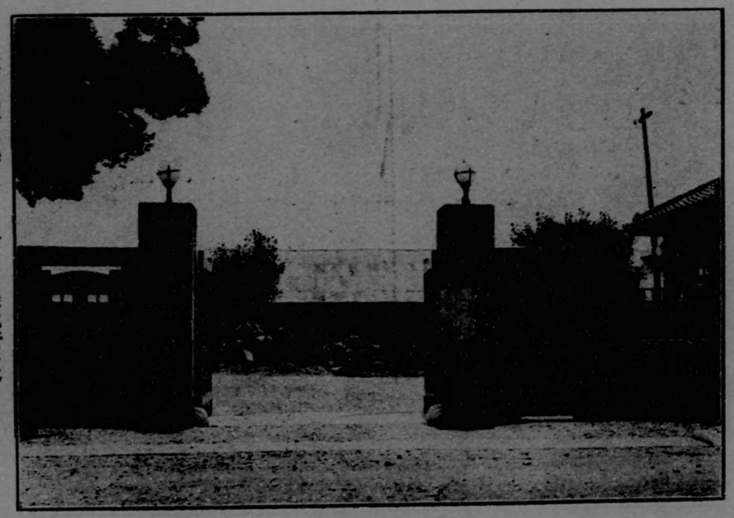
五、活量二千八百立方糎に達せざる者

六、視力各一・〇（萬國式視力表に依る）に達せざる者（海軍經理學校志願者に限り近視にして各眼視力一・〇に達せざる者及各眼視力〇・四に達せざる者）

七、識色力に異常ある者

八、傷痍、疾病、畸形等ある者にして海軍々人の服務に堪ふる見込なき者

海軍工機學校（横須賀所在）、（海軍機關學校は舞鶴所在）



海軍經理學校（東京市築地所在）

(八)學術試驗

學術試驗は中學校第四學年修業程度（概ね第二學期修業程度を標準とす）に於て行はれる、其の試驗科目は左の如くで玆には總合上昭和四年度分を掲げておく。

海軍兵學校	代數（負數、整數式、最大公約數、最少公倍數、分數式、方程式、冪法、反開法、比例、級數） 幾何（平面幾何全部） 化學（化學總論無機化學） 英文和譯 國語漢文及作文 物理（物性、熱、音、光、磁氣、電氣） 地理（日本、亞細亞、歐羅巴、北亞米利加、南亞米利加） 歷史（日本史、東洋史及西洋史中佛國大革命前迄） 和文英譯及英文法 口頭試驗
海軍經理學校	代數（負數、整數式、最大公約數、最少公倍數、分數式、方程式、冪法、反開法、比例、級數） 幾何（平面幾何全部） 化學（化學總論無機化學） 英文和譯 國語漢文及作文 物理（物性、熱、音、光、磁氣、電氣） 地理（日本、亞細亞、歐羅巴、北亞米利加、南亞米利加） 歷史（日本史、東洋史及西洋史中佛國大革命前迄） 和文英譯及英文法 口頭試驗
海軍機關學校	代數（負數、整數式、最大公約數、最少公倍數、分數式、方程式、冪法、反開法、比例、級數） 幾何（平面幾何全部） 化學（化學總論無機化學） 英文和譯 國語漢文及作文 物理（物性、熱、音、光、磁氣、電氣） 地理（日本、亞細亞、歐羅巴、北亞米利加、南亞米利加） 歷史（日本史、東洋史及西洋史中佛國大革命前迄） 和文英譯及英文法 口頭試驗

一科目でも其の成績が所定の資格に達せざる者は爾後試驗の繼續が出來ぬ。

第三　志願書提出期日

左の書類を海軍兵學校及經理學校志願者に在りては何年何月何日迄に當該志願校の海軍生徒採用試驗委員に提出すべき旨發表がある。

志願者戸籍謄本　一通

志願票（第一號書式）　二通

注意　毎年募集の時期になると、各市町村役場へ照會すると、心得書が下附せられるからソレに仍つて詳細御承知下さい。

第十三　海軍兵の教育

海軍に於ける教育は之を被教育者の側から見ると、士官教育、特務士官教育、准士官教育及び下士官兵教育となり、又之を教育科目から云へば精神教育、技能教育及び體育に分ける事が出來る。本章に於ては其の內の下士官兵教育の大體に就て說明することにしやう。

（一）海兵團教育

海兵團に於ける新兵教育は、海軍生活中にも述べた通り、清淨無垢白紙の如き新入團者に對して、國家の干城としての基礎的教育を授けるのが目的で、又將來の海上勤務に對する準備教育であるとも云へる。卽ち五ケ月に亘る本教育に於て一通り帝國軍人たるの型が備はり、又艦隊に乘り込んで差し當り間誤付かぬ丈の素養を與へるのである。

先づ精神教育方面では　明治大帝が軍人に對して賜はつた勅諭を奉讀し、聖旨を奉體して確固たる軍人精神を養ふことに精進し、或は日本建國の歷史を學びて我が國體の世界に冠たる所以を覺り、或は過去に先進の勳績を聽いて義勇奉公の心を固むる等勿論一定の型がある譯ではないが、敢て卑近なる例を擧げて見ると、

技能教育に於ては、海上勤務者としては詳しも熟達して居らねばならぬ所の短艇の漕ぎ方や或は端正な艦隊運動を作り、艦格活潑なる擧動を養ふ爲に必要なる所の各個教練其外に兵種に依り各々の職務を完うするに必要なる技術卽ち水兵なれば艦砲教練や水雷の取扱ひ方、機關兵なれ

ば船用機關の構造や、焚火術、潜水術、看護兵なれば衛生學や生理學と云ふ具合に專門的學問と技能の初歩が課せらるゝのである。

體育は將來紫劇なる海上の勤務に堪ゆる樣頑健なる體格と海兵としての輕快、敏捷な習慣を養ふことを目的として課せられる。其の種類には體操、劍道、柔道、銃劍術、器械體操あり、或は角力、綱曳、駈足、山登り其の他各種の運動競技等もあるが、學科と體育とが能く併行する如く適當に按配されて在る。

要するに海軍の新入生が僅か五ケ月位で一廉の海軍軍人に育て上げらるゝのであるから、其の教育は決して閑散なものではない。始めは隨分激烈とも感ぜらるゝであらうが、而も新兵の顏色を見ると何れも生々として愉快そうであり、其の體重なども入團前に比し著しく增加を示すに照らして見ても一方衣食住の過良なると共に半面に於て學科と體育との調和がよく出來てゐることも知れやうと思ふ。

（二）艦上教育

艦船に於ける教育も亦精神教育、技能教育、體育の三種であることは勿論である。其の中精神教育及び體育は海兵團に於けるものと方針や樣式が違ふものでないから之を省いて技能教育に就て見てみやう。

海兵團に於ける技能教育は一般的、概括的であるに反して、艦船に於ける教育は特定的で且つ一層奥行の深いものである。其の理由は海兵團に在る時は別に各自の固有配置と云ふものがないが、一旦艦船乘員となると各員に對し戰鬪配置が定められる。是は上は艦長より下一兵、否軍屬と雖も乘艦する剩夫從僕に至る迄同樣であつて、艦船としての最重要任務たる戰鬪の場合の各々の受け持ちの事である。平素の教育や諸作業まで殆んど總て此の戰鬪配置を基準として行はれるもので、艦船乘員にとつては自己の戰鬪配置を辱しめないと云ふ事程重要な事はないのである。

而して技能教育は特定の配置々々に從ひ、其の任務を完全に遂行出來る樣に必要なる智識と技倆とを修得せしむるものである。海兵團に於て受けた教育丈では未だ艦船の乘員として充分な働らきは出來ない。例へば大砲は如何にして彈丸、裝藥を裝塡するや或は如何にして照準を行ふやの事を會得しても、惰是等に熟練し且つ全砲員が調子を合せて其の大砲の全威力を發揮させるには未だ充分でない。戰鬪は大にしては國家存亡の岐れ目となり、小にしては一艦の運命、乘

員の死生に關するものであるから生易しい事ではない。從つて之に參加する乘員の教育も深刻であらねばならぬ。卽ち海兵團に於て手解きを受けた所を艦船で充分に練り上げ鍛へ通す必要があるのである。

以上は技能教育中配置教育と呼ばれるもので、各自の配置を基準として之に適當する樣に施される事から起つた名稱である。技能教育の中には右の外に補修教育と云ふものがある。是は配置教育の關係はないが配置教育の完成上必要である所の補助的智識を授け或は海軍軍人としての常識涵養上に資する爲のものである。

（三）練習生教育

以上の通り海軍兵に對する技能教育は海兵團に於ける基礎的教育、艦船に於ける配置教育及び補修教育を以て一通完了する仕組みではあるが、兵器の精巧なること及び其の更新の頻繁なること〳〵は右の教育を以て未だ足れりとせず、學校其の他の特別施設に依る專門的教育を必要として居るのである。

卽ち之を槪說すると砲術學校、水雷學校、潛水學校、工機學校、經理學校竝びに運用術練習艦航空隊練習部、海兵團練習部及び海軍病院練習部等に於ける練習生教程が夫であつて、練習生の種類は次の通りである。

一、普通科砲術練習生　（一）高等科砲術練習生
二、普通科水雷術練習生　（二）高等科水雷術練習生
三、普通科信號術練習生　（三）高等科信號術練習生
四、普通科電信術練習生　（四）高等科電信術練習生
五、普通科航空工術練習生　（五）高等科航空工術練習生
六、普通科機關術練習生　（六）高等科機關術練習生
七、普通科電機術練習生　（七）高等科電機術練習生
八、普通科看護術練習生　（八）高等科看護術練習生
九、普通科經理術練習生　（九）高等科經理術練習生
十、工術練習生　（十）特修科練習生

外に測的術、運用術、航空術、軍樂術、船匠術、掌厨術の各練習生教程があり各其の科に

於ける最高のものである。

普通科練習生は概ね二等兵、一等兵より試験の上採用され、修業期は六ケ月乃至九ケ月である。普通科練習生教程を卒業した者は特修兵と呼ばれ之に相當する識別章を服裝に著ける。而して艦船に復歸して夫々の要職に配置され、練習生中に修めた專門的技能を實地に應用することとなる。

然る後其の中の幾分は再び選拔されて各科の高等科練習生を命ぜられる譯であるが、夫は普通科教程を終りたる後海上勤務一年以上を經過した一等兵以上の者から採用せられる。高等科練習生の修業期も六ケ月乃至九ケ月で卒業すれば同じく海上勤務に復歸して一層重要なる職務に配せられる。勿論服裝上の識別章も普通科のものとは異なるのである。

くどい樣だが要するに、海軍に於ける教育は決して一朝一夕に完了さるるものでなく、海軍生活の全部を通じて教育であると謂ふても良い位である。從つて其の種類、過程も複雜で到底簡單に說明することは出來ないが、其の中でも下士官兵に對する技能教育は大體右の通りと思へば間違はない。

第十四　海軍志願兵について

（一）國家的に最も重要な志願兵

海軍兵には志願兵と徵兵との二つあることは既に說明した通であるが、近年海軍の兵器機關は非常に精巧複雜なものとなつて、之を取扱ふには相當な技術と熟練とを要するのに徵兵は其服役期間が短く漸く一人前になつた頃には現役から去つてしまうのでどうしても重要な配置に就く者は志願兵でなければならぬ、故に優秀な志願兵を得ると云ふ事は單に海軍のみならず國家に取つて頗る大切な問題で國力の消長に非常な影響を及ぼす次第である。其處で志願兵は我海軍の中堅となり漸次選ばれて下士官となり、優秀なる者は准士官となり特務士官迄進むのみならず一方下士官兵から海軍生徒になり遂に終校に進む道さへ設けられて居る。尙從來は志願兵で下士官以上に昇進せずして歸鄕した者も相當にあつたが將來は一層多く下士官に任用することに目下折角研

（二）志願の方法

府縣知事から海軍志願兵召募の告達が毎年十一月頃にあるから市役所や役場で掲示を見ればわかる。志願者は市、町、村役場を經て所方長官宛に願出ればよい。

檢　査

檢査は身體檢査と學術試驗の二つである。

一、身體檢査の程度

	十八年以上	十八年未滿	十七年未滿	十六年未滿	十五年未滿
身長（尺）	一五七、六	一五六、一	一五四、五	一五〇、〇	一四五、五
體重（貫）	四八、八	四六、九	四五、〇〇	四一、三	三七、五
備考	當分は軍樂兵の外五尺以上の規定も五尺まで低下せらるゝきても夫々規定あり。				

二、學術試驗の課目と程度

科目——讀書、算術（掌電信兵志願者には外に適性檢査を加ふ）

程度——高等小學校卒業程度

年　齡

水兵（掌電信兵を除く）機關兵、船匠兵、看護兵、主計兵　十七年乃至二十年

掌電信兵志願者たる水兵　十五年乃至十八年

軍樂兵　十六年乃至十九年

（三）兵種の撰擇

志願者は自分の志願する兵種を定めねばならぬが、之れには充分自分の長所短所好き嫌ひ、體格、學力等を考へて愼重に決定すべきである。他人の噂等に依り迷つてはならぬ、而して一旦兵種を定めて入團したる以上、之れを希望によつて變更することは出來ぬ。但し航空術練習生を卒業したる機關兵、船匠兵、主計兵等から水兵になり又經理學校普通科練習生を卒業したる爲水兵

機關兵等から主計兵に變はる場合は別である。海軍兵の兵種及職務の概要は第九「階級及職能」に既述の通りである。

（四）進級

既に第九「階級及職能」にて述べた様に海軍兵には四等兵から一等兵迄の四階級あり、下士官には三等下士官から一等下士官迄三階級あつて一等下士官から准士官（判任官一等）に進み准士官から特務士官（奏任官）に進級する。特務士官には特務少尉、特務中尉、特務大尉の三階級あつて兵科、機關科、主計科の特務大尉は特選に依り少佐以上に進級の途も拓けて居る。現に特務大尉で分隊長となつて居るものもあり、最近には主計少佐になつた人もある。

各進級停年は次に示す通である。

停年	特務少尉へ	准士官へ	一等下士官へ	二等下士官へ
海上勤務ならば	三年九箇月	一年九箇月	一年	一年
陸上勤務ならば	五年	二年四箇月	一年四箇月	一年四箇月

停年	三等下士官へ	一等兵へ	二等兵へ	三等兵へ
海上勤務ならば	一年	六箇月	六箇月	——
陸上勤務ならば	一年四箇月	八箇月	八箇月	約五箇月

備考
一、海上勤務とは艦船に乘組勤務するを云ひ陸上部隊に在て勤務するを言ふ。
二、准士官にして選修學生の課程を修了したる者は本項の停年を有せざるも特務少尉に任用せらる
三、特務少尉より特務中尉へは二箇年、特務中尉より特務大尉へは三箇年、停年を有するに至れば進級資格生ず

（五）恩給

軍人で十一年以上現役に勤めた者又は該年數勤めないでも戰闘又は公務に原因する傷痍、疾病に依り不具廢疾となり現役を離れた者は恩給を受ける事が出來る。若し恩給を受ける者或は恩給を受ける資格ある者死亡した時は其遺族は扶助料を受けることが出來る。玆に言ふ十一年以上勤めたる者とは正味十一年なくとも戰役、外國領海、各地の警備、飛行機、潛水艦、小艦逐艦乘り等に對する服役の加算をも加へて十一年以上になればよいのである。だから實際は八、九年位で

恩給資格を得る人が多い。

近時恩給改正の議があつて恩給年限が多少延長されるかも知れないがその場合には現役を退く時、恩給資格に達せぬ人の一時恩給は從來よりも餘程增額せられるものと信ぜられる。

又海軍に服役中恩給資格が得られなくとも滿期歸鄉後巡査看守の如き恩給の附く職を奉じた場合前の海軍服役中の勤務年が通算される事になるから大變有利である。試に少佐迄の普通恩給の年額を示せば次の通りである。（兵より進級したるものである兵學校卒業の士官は掲記せぬことにした）

普通恩給

在職年數	官級	少佐	大尉特務大尉	中尉特務中尉	少尉特務少尉	准士官
十一年		一〇八四円	七八四円	五六七円	四六七円	四〇〇円
三十年		一四九二	一〇七八	七八五	六四七	五五二
五十年		一九二二	一三八八	一〇一五	八三七	七一二

備考

一、本表は年額の最下限と中央と最上限とを示したもので一箇年毎に若干宛選加するものである

二、准士官の一級俸を受けたるものは少尉の額を給せらる

在職年數	官級	一等下士官	二等下士官	三等下士官
十一年		二八五円	二五五円	
十五年		三一三	二八三	二二五円

在職年數	官級	一等兵	二等兵	三等兵	四等兵
十一年		二〇〇月	一八〇円	一六五円	一五〇月
十五年		二二四	二〇四	一八九	一七四

單に十一年及十五年額を示す

十六年より五十年迄逓次增加あり

（此稿了）

第十五　日本海々戰の話

日清戰役の結果、下關條約によつて、我版圖に歸した遼東の山河を、獨佛と提携して清國に還附せしめた露國は、露清銀行の設立及東清鐵道の敷設權を獲得し、且清廷多事の機に乘じて、旅順口、大連及附近の地區を租借したのみならず、北清事變を利用し、兵力を以て占領した滿洲の諸要地を保有せむとして、清國との間に、三回に渉る秘密協商を開始したが、日英同盟と露佛同盟との實現を見るに及んで、漸やく之が還附條約を締結し、三期に分つて撤兵を斷行する旨を公約しながら、第二期撤兵の時期に至つて、俄かに其態度を一變し、曾に前約を履行せざるのみならず、清國に對し、更に新要求を提出し、加ふるに不穩の經營を鴨綠江の左岸に開始した。

之がため韓國の領土保全は侵迫せらるゝやうな形勢になつて來たので、我帝國は、三十六年八月露國との協商を開始したのであるが、根本主義に於て彼我の間に、甚しい懸隔があつたゝめ數次の折衝を重ね、三十七年一月十三日、正當なる我主張を具して、露國の熟考を求めたのであつた、然るに一月三十日に至るも、獨確答期日をすら指定して來なかつたのみならず、益々敏活なる軍事行動を試みるに至つたので、誠意と忍耐とを以て成るべく事を平和の中に解決しやうとのみ希望した帝國も、露國が、事も、平和を愛好せむとする誠意を有せないのを覺破したので、三十七年二月五日、遂に斷然の絶を切つて、同國に對し、自由の行動を採り、旅順の保障を求めることに決意し、大命は直ちに佐世保に集中せる東鄕聯合艦隊に降下したのであつた。

萬一に備へて居た我聯合艦隊は、二月六日敢然として、佐世保を出港し、敵の機先を制して、旅順仁川に、迅雷疾風的の攻撃を開始したのである。爾後三回に亙る旅順港口の閉塞と、八月十日の黃海々戰と、同十四日の彦山沖海戰等によつて、露國の東洋艦隊は殆んど再び起ち難い程の大打撃を受けたのみならず、十二月六日、二〇三高地の奪取によつて、旅順口は其死命を制せられ、同十六日、敵艦セヴアストポリーが城頭山下に破碎せられたのを最後とし、三十八年一月旅順口の陷落と共に、多年東洋に雄飛して居た露國の艦隊は、事實上全滅に歸したが、是より先き露國に於ては、夙に絶東に艦隊を增派する計畫を有して居たけれ共、婆羅的海方面は恰かも結氷期であつた爲め、其の解氷を待つて、遲航準備を行ふことゝなり、三十七年四月三十日に至り、

海軍海令部長侍従武官ロヂエストウエンスキー中將を司令長官とし、著々其の準備を遂行し七月四日には、戰艦七隻、巡洋艦一隻、驅逐艦九隻より成る主戰艦隊と、巡洋艦七隻より成る巡洋艦隊とを以て太平洋第二艦隊を編制し、其の後更に驅逐艦三隻と、假裝巡洋艦六隻を加へ、十月十五日、リボウ軍港を出發して、萬里東征の門出に就いた、皇帝は三度艦隊に親臨して、露國海軍の各擧を擁護すべき勅語を下し、艦隊の將士を激勵したのであつた。

かくて同艦隊は、二十二日の翼夜中、英國の東岸に於て、英國の漁船隊を、我水雷戰隊と誤認し、之を擊沈したやうな失敗を演じつゝ、十一月三日タンジールに入り、艦隊を二分して、主隊は口長官自ら之を統率し、喜望峰を迂回してマダガスカル島へ、枝隊はフエルケルサム少將の指揮下にスエズを經て、同島に於て集合すべく分離行動を採るに至つた。

三十八年一月六日、兩隊は無線電信に依り、漸やく連絡を取り得るに至ると共に、旅順口陷落の情報を得、一月九日ノシベ島錨地に於て全く相合するを得た、一方露國の軍事當局は、旅順陷落後方連絡を遮斷すべし、第二艦隊の狀況、之を遂行し難しとせば、婆羅的海に殘留する總艦を增派するも可なり」と近電命を發したので、三月十六日、四十五隻より成る敵の主隊はカムラン灣に向つて、ノシベを出港したのみならず、之等第二艦隊のリボウ出港後に編成された、ネボガドフ少將を司令官とせる戰艦一隻、海防艦三隻、裝甲巡洋艦一隻、運送船、工作艦、病院船等計十二隻より成る第三艦隊は、二月十五日、第二艦隊に合同すべく、既にリボウを出發して居るのであつた。

かくの如くにして、敵の艦隊は、時々刻々、東洋の海面に近づいて來た。

我海軍は、敵東洋艦隊の撃滅と共に、作戰上一段落を告げたので、更に之等遠來の新敵艦隊を邀撃するため、先以て艦體の修理に着手することゝなり、一部を必要なる方面に殘し、各隊、各艦は、交々內地に歸還して、或は艦底の繃合を剝ぎ、或は大砲の整度を檢し、或は機械を分解し或は汽罐を檢査する等、再び花々しき戰鬪をなし得る程度にまで、其の勢力を回復すると共に、逐次艦隊演習に集合して、朝から晚まで、絕えず、射撃其の他の訓練に從事して居た。

三月、四月と、敵艦隊の接近が時々刻々迫まつてくると同時に、我將士の訓練は、日々夜々に白熱化して來た、かの東鄕長官の訓示にもあつた通り、「敵の來らざるを恃むことなく、我當に待つあるを恃み」て、銀道戰鬪の術力を盡養したのであつた、大雨將に來らむとして曇穩に滿

つと云はうか、上は艦長より下は一給仕に至るまで、全艦隊の將卒は、日も維れ足らざる烈しい訓練に、其身體はヘト〳〵に疲れながらも、其精神のどん底には、盲ひ知れぬ自信を有すると共に、獻身殉國の赤心と、義勇奉公の覺悟とは、焰の如く、燃え盛つて居たのであつた。夜更け人靜まつて萬籟寂なく、艦上の哨兵が凍るやうな月光の下に佇める時、鬼の如き勇者の胸裏は、雷の如く艦内に滿ち、眼中又敵なしの概あるのみであつた。

事前の準備は完成した、今は只手ぐすねひいて、敵の來るを待つのみである、砲に一點の塵はなく、油磨きに磨かれた艦中は、銀色に輝いて、十二吋の巨彈の裝塡を待つて居る、人も、砲も、魚雷も、機關も、生々として、悉く生氣が立ち昇つて居た。

然るに四月五日、マラッカ海峽に入り十二日カムラン灣に到着したロ提督は、第三艦隊の合同を俟たず、浦塩斯徳に急航せむと欲したけれども、露國海軍軍令部の容るゝ所とならなかつたので、從前其の來着を待つこと一箇月、五月九日カムラン灣の北、四十餘海里に在るヴアン・フオン灣に於て、漸やく第三艦隊と合同したのであつた。

そこで、五月十四日、愈々朝鮮海峽に向つて、東方を迂回して、二十五日には、上海の沖合に到達し、一部の運送艦隊を上海に放ち、ロ提督は總艦艇三十八隻を率ひ、二十七日の正午を以て朝鮮海峽の中央を航過する如く、艦隊の行動を豫定し、二十六日正午には濟州島の南約六十浬附近に於て、約四時間の艦隊運動を行ひ、警戒を嚴にして朝鮮海峽に向け艦艇相啣んで北上して來た。

我艦隊の首腦部では、沈着嚴の如き東鄕司令長官を始め、冷靜水の如き加藤參謀長や、智謀神の如き秋山參謀などが、上村、片岡、出羽、三須、瓜生、島村、東鄕、武富、山田、小倉等の名將と共に、より〳〵軍議を凝らされ、かの有名なる七段備への戰法を以て、嚴密なる配備の下に、對州海峽を扼して居たのである。第三、第四、第五、第六、第七戰隊は、或は對州附近に、或は五島方面に、特裝巡洋艦數隻は遠く海峽の西方海面に出動して、專ら哨戒に從事し、主力たる第一、第二戰隊は艦物遊附近に在つて、敵の北上に備えて居た、炭水は滿載せられ、砲機は整備せられ、將卒の士氣は、いやが上にも高潮し切つて居た。

かくて五月二十六日の夜は過ぎて、愈々世界の海戰史上に特筆大書せらるべき大海戰日たる、五日二十七日の午前となつた。東方の水平線上に、一抹の彩雲が、ぼんやりと、黎明の曙光を投げかけ初めた午前四時四十五分、突如一閃の飛電は、哨艦信濃丸から對州海峽の艨霧を破つて全艦隊に「敵艦見ゆ」との警報を與へた。

尾崎灣に在つた片岡第三艦隊司令長官は、之を東郷司令長官に轉電すると同時に、麾下艦艇に急速豐定の部署に就くべきを命じ、自ら、第五戰隊及第十一、第十六、第十七、第十八、第二十艦隊及白鷹を率ゐて、對州東水道に向つた、東郷長官が「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動、之を撃滅せむとす、本日天氣晴朗なれども波高し」との千古の名文を以て、第一の報告を、大本營に打電されつゝ、第二艦隊を率ゐ、沖の島の北方を指して、鎭海灣を出動されたのは、正に午前六時であつた。

見渡せば、大小の艦艇四十餘隻は、檣樓高く大將旗を飜せる旗艦三笠に率ゐられ、威風堂々、大海を壓し、濛々たる煤煙を天空にたなびかせつゝ、滿艦の將卒は躍り立つて、甲板を蹈むこと三度、勇躍して、乾坤一擲の大舞臺に乘り出して行く、勇壯を通り越して、形容すべき言葉もない。

哨艦よりの報告は相繼いでくる、軍艦和泉からは、敵艦隊の編制より、陣形、針路、速力等に至るまで、巨細の狀況を遺憾なく報告してくる、敵は正に嚢中の鼠である。

敵が對州東水道を通過せむとするのを知つた我主力艦隊は、之を沖の島附近に邀撃するに決し午後一時過同島の北方に達し、敵航路の前方を扼して、恰かも勢子に追はれた鬼の一群を待つが如くに、網を張つた狀況に占位した、午後一時十九分には、出羽司令官の率うる第三戰隊を南西微西に、幾ばくもなくして第五、第六戰隊を西方に認めた。

午後一時三十九分、南西遙かの水平線上には、黃土色の煙突が折柄の濛氣の中からズラリと竝むで見えはじめて來た、艦隊長蛇の如く、海面を嶽ふて航進してくる有樣は、敵ながらも天晴れの武者振りである、憲俊を率ゐて、三笠の最上艦橋に立たれた、東郷長官の双眼鏡裡には、三笠の南南西約七海里に、二列縱陣の敵艦隊が、右翼列にはオスラビヤ、シソイヴエリキー、ナヒーモフの四隻より成る一隊を置き、左翼列にはボロヂノ型戰艦四隻より成る一隊を先頭に位置せしめ、其の後方には、ニコライ一世外三十隻の艦船が數海里に亙り、連綿として續航してくるのが眺じ出された。

一時五十五分、三笠の檣頭に、一旒の信號旗が、スルヽと揭げられた、之ぞ有名なる皇國の興廢此一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ。との信號である。然り、眞に皇國の興廢は此の一戰に在るのである、開艦隊の艦艇を一擧に決すべき所謂決戰である、皇國の存亡を賭する一六勝負である、我艦隊にして敗れんか、東亞の海上權は敵手に落ちるのである、其曉に於ては、我沿岸は敵の封鎖を受け、東洋の海面は、敵の

勢力圏内に入るものであつて、露西亜との交通も不可能となり、満洲軍との連絡も断たれるのである、国民生活の必需品をはじめ、諸産業の原料品に至るまで、海外からの輸入は一切杜絶するのである、国民が奴隷に地団太踏むでも及ばざるは、我海上の武力が衰へて、東洋の海上権を失つた場合の、我国家の前途である、これは、過去も、現在も、将来も、我国民にとつては、平戦両時を通じて、決して忘るべからざる大問題である、此時此際、全艦隊を率ゐて、此大任に当つた、東郷長官の胸中を推察する時、誰か一掬の涙なきを得るであらうか、全艦隊の将卒は、此信號を得ざる見て、勇気凛々として、勝敗を度ゆるまでの感激に打たれた、信號兵はつぶれよと許り喇叭を握りしめた、砲員は砕けよと許り砲弾を抱えしめた、石炭をくべる十能は、破れよとばかり舞ひはじめる、汽罐は真紅に燃え、機械はうなりを生じて廻転する、将卒の眦は裂けむばかり、噛みしめた唇からは血も滴らむばかり、満艦の将士聞よはして、倒れてもやまぬとの大覚悟が、心から心へと傳はるのみ、悲壮勇烈の氣、早く既に敵を呑呑するものがあつた。

三笠を先頭とし敷島、富士、朝日、春日、日進の順序に、単縦陣の我第一戦隊は、東郷長官之を直率し、上村中将の率ゐる出雲、吾妻、常磐、八雲、浪間、磐手より成る第二戦隊を従へて

十參十四時一後午日七十二月五年八十三治明ろそさされ」間に將武清大洋本日りあに戰一此發開の國皇
參あで號信の校不來下つまよ力勞勵信海一貫各りよに戰一此發開の國皇てしに座のスされこはる

敵に迫まつた、此まゝ相接近すれば、互に一舷の砲火を交えつゝ、航過し終るに過ぎない、さりとて敵前に於て針路を反轉するが如きは思も及ばざる處である。

然るに意外も意外、南西微南の針路を以て航進中なる先頭の三笠は、二時五分、敵前約八千米に在りながら突如、取舵を採つて、東北東に轉針した、後續の諸艦も、之に從はねばならぬ、正に是れ東鄕長官の勇斷である、机上の演習に於て、かくの如き手段を採らむか、多くの場合に於て、下策の下策として惡評を蒙るに過ぎないのである、然るを皇國の興敗を其の双肩に擔ひながら、重大なる合戰の初頭に於て、かくの如き方法に出られた其の勇斷と果敢、之れぞかの大捷を博した最初の一大原因であつて、實に後世の範りに模倣を許さざる所、天下一品の獨壇場であつた、敵艦隊の幕僚が「しめた、敵は轉囘した、我は勝つた」と云つたと言ふのは、實に此刹那であつた。

轉囘のために、我各艦の位置が一時、一點に止まるのを見て、敵は得たりとばかり、一團の白煙がスウオロフより勝ると同時に數艦一時に砲火を開いて、我れに向つて猛射をはじめた、先頭に在る三笠の附近は巨彈の雨注で、爆煙と水煙とが、艦影を蔽ひかくした程である、けれ共長官は、右手の双眼鏡で、時々敵を睨みながら、左手には一文字吉房の軍刀を握りしめて、微動だも

されない、泰然として彼我の狀況を見詰めながら、なか〳〵射撃開始の命を出されない、加藤參謀長も亦泰然として、全艦隊の對勢を眺めて居る、秋山參謀は炯々たる眼光で、敵の動作を熟視して居る。

第一戰隊の各艦が、針路を變じ終ると、同時に三笠は猛然として敵の先頭を壓迫すべく、ズン〳〵と距離を詰めて行く、所謂丁字の戰法が敷かれはじめたのである。

午後二時十分、戰機正に熟するを見て、遂に「打方始め」の令は出た、待ちに待つた將卒は、それとばかりに猛烈なる射撃を開始して、敵の左右兩列の先頭艦たるスウオロフ及オスラビヤに集彈した、距離正に六千四百 米。

かくして、日本海大海戰の幕は切つて落され、沖の島一帶の海上は、彼我射撃の砲煙と、砲彈炸裂の爆煙と、火災の黑煙と各艦の煤煙とで、所謂天日爲めに暗しの壯觀を呈するに至つたのであるが、敵は漸次東方に變針して、左翼列たる第二、第三戰艦隊は、右翼列たる第一戰艦隊の後尾に入るが如き隊形となり、不規則なる單縱陣を以て、我れと並航する狀態となり、先頭に在る第一戰艦隊の旗艦スウオロフは我第一戰隊の中央と相對し、第三戰艦隊の旗艦ニコライ一世は、駱々我第二戰隊の後尾と相竝むだので、スウオロフ及第二戰艦隊の旗艦オスラビヤは我諸艦射撃の焦點となり、殊にオスラビヤの三煙突は射撃の好目標となつたので、我集彈を受けて大火災を生じ、檣は折れ、煙突は裂かれ、裝甲は龜裂し、砲塔は破れ、甲板は黑焦げとなり、死屍累々の慘狀を呈し、黑煙は濛々として空に騰つた。

距離愈々近付いて、五千 米 內外となるや、我猛撃は一層其勢力を增し、殆んど百發百中の威力を發揮し、スウオロフの司令塔に命中した一彈は、敵將ロヂエストウエンスキーの頭部を傷け且舵機を破壞したので、同艦は右舷に廻頭して列外に出て、幾ばくもなく沈沒して仕舞つた。

オスラビヤに代つて第二戰隊の先頭に立つたシソイヴエリキーもスウオロフに代つて第一戰艦隊の先頭に立つたアレキサンダー三世も、亦、我集彈を蒙り、大火災を生じて列外に出たので敵の陣形は全く亂れ、且西風に靡ける火災の黑煙は、濛氣と相混じて海面を蔽ひ、時々射撃を中止しなければならない程であつた。

アレキサンダー三世に代つて嚮導艦となつたボロヂノの艦長セレーブレンニロフ大佐は、我艦隊の後尾を突破し、北方へ脫走せむとして轉針したが、我第一戰隊が、日進を嚮導艦とせる逆列隊形に急變して、其先頭を壓迫するに遇ひ、再び東方に變針して第二戰隊の猛火を受くるに至つ

た。

アレキサンダー三世が火災を消して戦列に復し、混乱せる艦隊を率ゐて南方に向ふに至り、彼我両隊の距離漸やく遠さかつて煙雾の中に敵影を見失ふに至つた。

そこで、我主力部隊は、行く〳〵隠見せる敵の巡洋艦等を緩射しつゝ南下したが、午後五時二十七分第一戦隊は再び北方に転針して、敵の主力を索め、第二戦隊は砲撃によつて我第三戦隊以下の敵巡洋艦と交戦中なるを察知し、南西に向ひつゝ敵に迫まつた。

かくて、第一戦隊は北西の針路を以て前進中、五時五十分頃、左方至近の距離に在る敵艦ウラールを一撃の下に撃沈し、尚北方に索敵中、敵主力の残艦ともおもはれるものが、数隻一群となつて北東方面に遁走中なのを発見したので、直ちに之に近付いて、並航戦を開始した、之れは巣きに我視界外に逸し去つた部隊が、隊伍を整へ、再び浦塩斯徳に向ふ途中なのであつた。

我猛烈なる砲火が、再び彼等の頭上に注がれたと思ふや否やアレキサンダー三世は直ちに列外に逸して後方に落伍し、ボロヂノは大火災に罹つて、七時二十三分見る見る中に沈没して仕舞つた。

時既に日没に近く、夕陽漸く傾き、視界自ら狭小となつたのみならず、我水雷戦隊は既に漸次敵に肉迫せむとしつゝあるを以て、長官は、七時二十八分、爾後の攻撃を駆逐隊及水雷艇隊に譲り、其の他の全軍には、翌朝、鬱陵島に集合すべきを電命し、第一戦隊を率ゐて、血腥き戦場を去り、八時過、第二戦隊を合せ、遠く鬱陵島方面に向ひ北上して敵の遁竄に備へた。

是より先き我出羽中将の率ゐる第三戦隊たる、笠置、千歳、音羽、新高と、瓜生中将の率ゐる第四戦隊たる浪速、高千穂、明石、対馬と、片岡中将の統率せる第三艦隊中の二隊たる、武蔵少将の率ゐる第五戦隊、厳島、鎮遠、松島、橋立、八重山と、東郷少将の率ゐる第六戦隊、須磨、千代田、秋津洲、和泉とは、午後二時過我主力が、初めて敵と戦闘を開始するや、直ちに敵の後尾を衝かむがため、急航南下し、第三、第四戦隊は、共同して二時四十五分から、其の優速を利用して、敵の前後左右に出没し、オレーグ、アウロラ、スウエートラーナ、アルマース、ドンスコイ、モノマフ等の巡洋艦及運送船隊等を攻撃し、四時過、全く之を潰乱せしめた、敵は個々分裂して、終にまた収拾すべからざる状態に陥つた、四時二十分頃、第四戦隊は敵の一運送船を撃沈し、他の一隻に大損傷を与へ、第五、第六戦隊と合して更に敵を掩撃する内、同四十分頃我主隊に攻撃されて南下して来た四隻の敵艦は、之等の巡洋艦隊と相合したので、第四、第六戦隊は少時近距離に於て、之と苦戦するの窮地に立ち、我浪速及笠置は敵弾を受け、應急修理のため

列外に出づるのやむなきに至つた。

五時三十分頃、南下して來た我第二戰隊の砲撃によつて、敵は益々混亂に陷り、北方に遁れんとした其大部は、第四、第五、第六戰隊の追撃する處となり、スウオロフ、カムチヤツカ等は撃沈さるゝに至つた、かゝる中に、鬱陵島集合の電命に接し、之等の各隊は戰闘を中止して主隊に合すべく北進したのである。

猛鷲の戰ひ眺めて、爪を研ぎ、羽ばたきをしながら、時機を待ちつゝあつた、群鷹にも似た樣な我水雷戰隊は、時こそ來れと敵に肉迫しはじめた、由來我水雷戰隊たる、驅逐艦や、水雷艇の勇敢なる突撃に至つては、曾既に定評がある。かの威海衛に於ける水雷艇の夜襲と云ひ、旅順口外に於ける驅逐艦の猛襲と云ひ、日本人の性格に適した魚雷攻撃は、我海軍の獨味であると共に實に御万國民の誇りである。其の水雷戰隊が、素破とばかり、敵陣に躍り入つたのである、殊に晝間の戰闘に大打撃を受け、右往左往する敵艦の事である、堵を失つた群雀を目がけて、鴉巢の猛威を振ふにも似て居る、第一、第二驅逐隊及第九艇隊は北方より、第三、第四、第五驅逐隊は東方より、第一、第十、第十五、第十七、第十八、第二十艇隊は南方より、殆んど三面合圍の形

を以て、敵に肉迫した、朝來の風は稍々靜まつたけれども、波濤猶高くして、船體の動搖は五六十度に達し、羅針は轉顚して殆んど其用をしない、艦首から覆ひ被さつてくる怒濤を潜きながら突撃に繼ぐに突撃を以てし、一艦去れば一艦迫り、發射した魚雷は、敵の前後左右から、矢の如く突進しては命中爆發する、晝を欺く敵の探照燈は其處にも、此處にも一上一下して、驅接に追なき我水雷戰隊の決死的夜襲を防いで居る、其の光芒の中には、或は白く、或は赤く、濛々たる砲煙が照し出され、夜襲艦艇の附近に奔騰する水煙は、白銀の柱の如く輝き、發射管は、黃金色に照らされて、發砲の閃光と相映じ、眼もくらまん許りである、眞に之れ壯絶の極致であつた、甚しきに至つては、敵の備砲の俯角が利かぬ程に迫つた、艦を沈め、何艦に命中せしめたのかが判らぬ程の亂戰で、所謂當るを幸ひ薙ぎ倒したのである、或は敵の列中に突入し、其の機砲彈が雨の如く落下する中に、魚雷を發射した驅逐艦もあれば、或は敵の隊列を横斷して、其の反對側に出で、敵甲板上の人員を、指呼の間に目撃し得るまで、肉迫襲撃を決行した水雷艇もある、亦以て如何に猛烈なる夜襲振りであつたかを想像する事が出來やう、夜が明けて見れば、視界及ぶ所寂として敵の片影もなく、只怒濤の中に、或は木片や釣床類の漂ふのみであつて、味方は僅かに水雷艇三隻を撃沈されたに過ぎないのであつた、反之

敵の大部分は、大損害を被り、各隊、各艇、互ひに分離し、只ネボガトフ司令官の率ゆる、ニコライ一世をはじめアリヨール、アプラキシン、セニャーヴィン、イズムルード等の一隊が辛うじて、此激戦場裡から脱れ得て、北二十三度東の針路を以て、一意浦鹽斯徳に向つて居るのみであつた。

天明之等の敵艦は、戦慄すべき夜來の襲撃から脫し得て、まづ一安心といふやうな狀態の許に鬱陵島の南方約九十海里に達した、見渡せば、数條の煤煙が見える、味方艦隊のそれかと思へば、それこそ、蠅の如くに接觸を保つて居る我第五戰隊であつた、午前八時頃には、我第四、第六戰隊をも認むるに至り、次で其名を聞くだに恐ろしき、我三笠以下の主力部隊が一隻の缺けたるものもなく、隊伍堂々威風凛然として又もや自己の行手を遮つて居るのを發見したのである。

昨夜來北上して、浦鹽への敵の通路に備へて居た我艦隊は、二十八日午前五時、鬱陵島の南徹西約三十海里に達し、五時三十分將に索敵行動を開始せむとする時、南方約六十海里に在る第五戰隊より、東方に敵艦隊を發見せる通報に接したので、直ちに之に向ひ、九時三十分頃、ネボガドフの一隊と遭遇し、竹島の南西約十八海里の地點に於て、全く之を包圍し終つたのである。敗

残の敵は勿論我艦隊の對手ではない、各艦から砲火を浴つたけれども、彼等は應戰の氣色も見えない、イズムルードのみは、高速力を利用して遁走したが、ニコライ一世其の他の諸艦は、俄かに降服の信號を掲げ、軍艦旗を半降したので、東鄕長官は、秋山參謀を派して、意のある所を傳へしめ、且同少將を伴なひ來らしめた。

午後一時三十七分、同少將は、軍使を乘る、我水雷艇に乘じて、三笠に來艦したので、東鄕長官は之を將官室に引見し、正式に敵の降服を受けた、東海の名武將東鄕海軍大將の前に、西歐の老提督ネボガドフ少將が、半白の鬚髯を顫はして遜走したが、降を我軍門に乞へる此歷史的の光景は、實に光輝ある主艦戰闘の最後を彩る、悲壯なる一場面であつた。

此間、他の方面に於ては、まだ數多の部分的戰闘が行はれて居た、といふのは、敗殘艦艇の追撃に任じ、所謂戰場掃除をやつて居た爲めであつて、實に八方面に分れて居た、或は我驅逐艦 漣が、敵艦逐艦ベドウイを捕獲し敵の司令長官其他チヌイを擊沈したり、音羽、新高が敵の巡洋艦スウエートラーナを竹逢灣沖に擊沈したり、新高及叢雲が敵艦逐艦ブイスツルイを竹逢灣北方の海岸に擱座破滅せしめたり、磐手、八雲が敵艦ウーシヤコフを擊沈したり、第四戰隊、第二艦逐隊及音羽、新高、朝潮、白雲、吹雪等がドミトリ

ドンスコイを鬱陵島の南東岸に沈沒せしめたり、不知火が蔚山沖に敵艦逐艦グロムキーを捕獲したり、其他我假裝巡洋艦が敵艦シソイヴエリキー、ナヒーモフ、モノマフ等を拿捕したり、逃走する敵の追撃や、戰鬪力を失つた敵艦始末やらに、戰場は著しく擴大して、東西百八十海里南北百八十海里に達し、全線の狀況はなか〳〵判然しなかつた程である。

然るに刻々の報告が集まつて見ると、結局、三十八隻の敵艦艇中十九隻は撃沈せられ、五隻は捕獲せられ、二隻は抑留せられ、其の他は或は中立國に入りて武裝を解き、或は擱岸破壞沈沒し捕虜に入りたるものは、僅かに、巡洋艦一隻と、駆逐艦二隻とに過ぎなかつたのみならず、敵將ロヂエストウエンスキー以下六千百餘名の將卒は俘虜となり、其の死傷は四千五百餘名に達したのであつた、之を我戰死傷七百餘名と水雷艇三隻の沈沒を見るに過ぎなかつたのと對比すると、我艦隊は實に千古比類なき海戰上の大勝を博したといふより外ないのである、世界のあらゆる人人が、空前の讃辭を呈したのも、亦所以ありと云はねばならない。

かくて敵の第二、第三艦隊は全く撃滅せられ、其の東洋艦隊と共に、露國の全艦隊は殲滅せられ、我近海の海上權は完全に我手中に入り、國民の生命や財産は勿論、海外との交通貿易も、滿洲軍との後方連絡も安全となり、遂に日露の戰役を終結せしむるに至つたのであつた。

今にして當年の狀況を回顧し、且つ五月三十日に
明治大帝より
聯合艦隊は敵艦隊を朝鮮海峽に邀撃し、奮戰數日、遂に之を殲滅して空前の偉功を奏したり。
朕は汝等の忠烈に依り、祖宗の神靈に對ふるを得るを慶ぶ、惟ふに前途は尚遼遠なり、汝等
益よ奮勵して、以て戰果を全ふせよ。
との畏多き勅語を賜はりたるを顧ふ時は、眞に萬感胸に迫つて、只涙あるのみである。

敵の全艦隊を殲滅し、日露戰役を終局に導き、以て我國家を泰山の安きに置き、國威を中外に發揚した、日本海々戰の優勢は前述の如くであるが、そも〳〵かくの如き大捷を得るに至つた原因は何であつたらうか、言ふ迄もなく、天佑と神助と、明治大帝の御稜威と、艦隊の善戰善謀とに據るは勿論ながら、看過すべからざる大原因は、實に、國民が臥薪嘗膽、擧國一致して、此大戰に當つたこと、國民の思想精神が、頗る堅實剛健であつた事であると思ふ。而して現在一部の國民の、國防に關する觀念や、軍隊に對する意氣込や、國家に對する思想や、社會に於ける思潮などを觀りみ、靜かに現在の國際關係を考察すれば、吾人は當年より以上の一大警悟と緊張味

とを以て將來の情勢に考慮せねばなるまいと思ふ。

かの華府會議によつて、移動兵力のみならず、防備地區にも制限を與へられた我海軍の現狀を考ふれば、外國との交通貿易や、海外發展と、密接不可離の關係を有する我海上武力の整備に關して、お互ひ國民は、海上權の優劣が直ちに自己の生命、それ自身の存否であることに對して、海國民としての徹底的覺悟を有せねばなるまいと思ふ。

壽府に於ける第二回軍備縮少會議は、痛切に吾人に對し、幾多の刺戟を與へたではないか、東西南洋の文明を包容し、融合し、統一すべき運命を荷ひ、世界に平和を指導すべき權威と使命とを有する我國民は、よく世界の實情を觀破し、海陸の武備を充實し、ありとあらゆる方面に於て眞に堅實にして誤りなき方策を採り、以て國運をして、益々隆昌ならしむる如く、奮起せねばなるまいと思ふ、若し此處に目醒むること、一日遲ければ、百年悔ゆるとも及ばざる事態を惹起せじとは限るまい、殷鑑遠からず、之を日本海々戰に見るべきである。彼我其の位置を轉倒したとして考究せば、吾人は慄然として、肌に粟を生ぜずには居られないではないか、太平洋問題の將來を察する時、我海軍をして常に當年の東鄕艦隊の如くならしめざるべからざるは、海國民の遺次顧沛も忘れてはならない處であらうと思ふ。

もしそれ、

海上を制するものは必ずよく海上貿易を管制し、世界の海上貿易を管制するものは、必ずよく世界の富を管制す、果してよく世界の富を管制せば、世界そのものを管制す。

との箴言を熟考し、

明治大帝の御製

いそしみてます〳〵船はつくらなむ
うみをめぐらす國のかために

とを拜誦せば、吾人の覺悟すべき處、自ら明らかなるを得べきである。

今日の海軍 終

第十五　日本海々戰の話

アニヂアゾトスエヅ艦戰國米

排水量十八萬二千噸、速力二十七節、主砲四十糎(口徑)砲八門、副砲十四糎(口徑)砲十六門、搭載機百二十機、乘員二千五百名、建造費一億二千萬弗

ンソルネ艦戰國英

排水量二十萬三千噸、速力二十八節、主砲四十糎(口徑)砲九門、副砲十四糎(口徑)砲十六門、搭載機百二十機、乘員二千五百名、建造費一億二千萬弗

アニルオフリカ艦戰國米

排水量三萬五千噸、速力二十三節、主砲四十糎砲九門、副砲十二糎砲二十門、魚雷發射管十二門（水中）、飛行機三機（艦尾）

ドツフ艦戰洋巡國英

排水量三萬十千噸、速力二十四節、主砲三十八糎砲八門、副砲十四糎砲八門、魚雷發射管四門（水上）、飛行機四機（艦尾）

ガトラサ艦中空航國米

基本排水量三萬三千噸、速力三十三節、航續力一萬浬、飛行機搭載數百二十機

ルダーイ艦中空航國英

基本排水量二萬三千噸、速力三十四節、航續力一萬浬、飛行機搭載數三十機

昭和三年九月三十日調

第一表

帝國艦艇一覽表

昭和三年九月三十日調

軍艦ノ部

戰艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
戰艦	扶桑	米 一九二・〇	米 二八・六	八・六	九三〇・六	ト	節 三十六	八	四	明治四五・三	大正三・三	大正四・一二	吳工廠
〃	山城	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	伊勢	一九五・〇	二八・六	八・七四	三一・二六〇	〃	〃 三十六	〃	〃	大正二・二	四・三	六・三	〃
〃	日向	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	〃	四・五	五・一二	神戸川崎造船所
〃	長門	二〇一・一七	二八・九六	九・一四	三二・八〇〇	〃	〃 四十	八	〃	〃	六・一	七・四	三菱長崎造船所
〃	陸奥	〃	〃	〃	〃	〃	〃 四十	〃	〃	〃	八・二	九・二	吳工廠
〃	金剛	一九九・〇	二八・〇	八・〇	二七・五〇〇	〃	〃 三十六	八	四	明治四四・一	大正二・八	英國ヴィツカース社	
〃	比叡	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	横須賀工廠	
〃	榛名	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	神戸川崎造船所	
〃	霧島	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	三菱長崎造船所	

巡洋戰艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
巡洋戰艦	金剛	一九九・〇	二八・〇	八・〇	二七・五〇〇	ト	節 三十六	八	四	明治四四・一	大正二・八	英國ヴィツカース社	
〃	比叡	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	横須賀工廠	
〃	榛名	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	神戸川崎造船所	
〃	霧島	〃	〃	〃	〃	〃	〃 三十六	〃	〃	四四・一二	三・八	三菱長崎造船所	

計四隻

一等巡洋艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
一等巡洋艦	古鷹	一七六・七	一七・五四	六・三〇	七一〇〇	ト	節 二十	六	三	大正一四・一	昭和二・一一	昭和三・三	神戸川崎造船所
〃	衣笠	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	一四・二	二・一二	三・一二	三菱長崎造船所
〃	青葉	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	一四・一一	二・一〇	三・一〇	神戸川崎造船所
〃	妙高	一九二・〇	〃	〃	九〇〇〇	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一〇	二・九	三・一二	三菱長崎造船所
〃	那智	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一〇	二・一一	三・一二	横須賀工廠
〃	足柄	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一二	三・一	三・一二	吳工廠
〃	羽黒	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一二	三・一	三・一二	神戸川崎造船所
〃	高雄	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一二	三・一	三・一二	三菱長崎造船所
〃	愛宕	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一二	三・一	三・一二	横須賀工廠
〃	鳥海	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	一四・一二	三・一	三・一二	吳工廠

計四隻

二等巡洋艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
二等巡洋艦	利根	二〇九・七	二〇・三	六・三	五一〇〇	ト	節 二十	四	二	明治四五・三	大正三・一一	大正四・一一	佐世保工廠
〃	筑摩	二一三・〇	二〇・三	六・三	五一〇〇	〃	〃 二十	〃	〃	大正二・一二	四・九	五・一二	同
〃	平戸	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	矢矧	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	天龍	二一三・〇	二〇・三	六・三	五一〇〇	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠
〃	龍田	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	球磨	一五二・〇	一四・三	五・〇	三一〇〇	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	多摩	〃	〃	〃	〃	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	北上	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠
〃	大井	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	木曾	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	長良	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	五十鈴	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	名取	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠
〃	由良	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	鬼怒	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	阿武隈	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	那珂	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠
〃	川内	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	神通	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	夕張	一二五・〇	一二・二	四・三	二一〇〇	〃	〃 十四	六	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠

計二十一隻

二等巡洋艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
二等巡洋艦	筑摩	二一三・〇	二〇・三	六・三	五一〇〇	ト	節 二十	四	二	大正一四・一	昭和二・一一	昭和三・三	佐世保工廠
〃	矢矧	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	平戸	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	天龍	二一三・〇	二〇・三	六・三	五一〇〇	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	龍田	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠
〃	球磨	一五二・〇	一四・三	五・〇	三一〇〇	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	多摩	〃	〃	〃	〃	〃	〃 十四	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	北上	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠
〃	大井	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	木曾	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	長良	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	五十鈴	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	名取	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠
〃	由良	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	鬼怒	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	阿武隈	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	那珂	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠
〃	川内	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	神通	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	夕張	一二五・〇	一二・二	四・三	二一〇〇	〃	〃 十四	六	〃	〃	〃	〃	佐世保工廠

二等巡洋艦 計二十一隻

一等巡洋艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
一等巡洋艦	加古	一七六・七	一七・五四	六・三〇	七一〇〇	ト	節 二十	六	三	大正一四・一	昭和二・一一	昭和三・三	神戸川崎造船所
〃	古鷹	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	同
〃	衣笠	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	青葉	〃	〃	〃	〃	〃	〃 同右	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	妙高	一九二・〇	〃	〃	九〇〇〇	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	那智	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	足柄	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠
〃	羽黒	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	神戸川崎造船所
〃	高雄	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	三菱長崎造船所
〃	愛宕	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	横須賀工廠
〃	鳥海	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二十	〃	〃	〃	〃	〃	吳工廠

一等巡洋艦 十二隻

内未成 七隻

潛水母艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
潛水母艦	韓崎	一二六・七	一一・五	四・六	二一〇〇	ト	節 一五	二	二	大正一四・一	昭和二・一一	昭和三・三	英國ホーソンスレー社
〃	胸橋	一二五・〇	一一・〇	六・三	二一〇〇	〃	〃 一五	二	二	〃	〃	〃	佐世保工廠
〃	迅鯨	一二五・〇	一一・〇	六・三	二一〇〇	〃	〃 一五	二	二	〃	〃	〃	同
〃	長鯨	〃	〃	〃	〃	〃	〃 一五	二	二	〃	〃	〃	三菱長崎造船所

航空母艦

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
航空母艦	若宮	二一一・三五	二四・六四	九・七	一〇、三五〇	ト	節 二五	二	二	不明	不明	不明	英國
〃	鳳翔	一五九・四四	一八・九〇	六・一七	九、五〇〇	〃	〃 二七	二	二	大正一〇・一二	一一・一二	一二・一二	浅野造船所
〃	加賀	二一七・九三	二一・〇	七・三四	二六、二〇〇	〃	〃 二八	三	四	一〇・一二	一一・一二	一二・一二	横須賀工廠
〃	赤城	二五三・〇	二六・〇四	八・三五	二六、九〇〇	〃	〃 二八	三	四	一〇・一二	一一・一二	一二・一二	吳工廠

航空母艦 計四隻

水母

艦種	艦名	垂線間ノ長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備考	竈	發射管	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
水母	不明	不明	二・九	不明	三四	明治三十八年十月軍艦ノ類別ヲ定メラル							

等巡洋艦

二等巡洋艦　計二十一隻

北上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
大非	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
木曾	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
長良	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
五十鈴	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
名取	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
由良	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
鬼怒	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
阿武隈	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
那珂	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
川内	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
神通	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
夕張	二三・〇	五九二・〇	五八三・一〇〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
十四糎	六機銃	二	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

航空母艦

航空母艦　計四隻

若宮	二一・三五	二四四・八六	五七	五、八五五	二	八糎	二五糎	二	不明	大正九、三	不明	大正一〇、一一	英國	進水迄ハ淺野造船所ニテ其後ハ橫須賀工廠ニテ	佐世保工廠	八、九	〃	九、七
鳳翔	二五九	四五二・八四	五〇六・一七	九、五〇〇	二	十四糎	八糎高角	二	不明	大正一〇、一二	不明	大正一〇、一二	英國	進水迄ハ淺野造船所ニテ其後ハ橫須賀工廠ニテ	佐世保工廠	八、一二	〃	九、七
加賀	二一七	九三五一・二四	一	二六、九〇〇	二	十二糎十二糎高角	二	不明	大正一〇、一二	不明	大正一〇、一二	英國	進水迄ハ淺野造船所ニテ其後ハ橫須賀工廠ニテ	佐世保工廠	八、一二	〃	九、七	
赤城	二三・〇	四五六・三五	二六、九〇〇	二	十二糎十二糎高角	二	不明	大正一〇、一二	不明	大正一〇、一二	英國	進水迄ハ淺野造船所ニテ其後ハ橫須賀工廠ニテ	佐世保工廠	八、一二	〃	九、七		

潛水母艦

潛水母艦　計四隻

韓崎	二六・七一	四五・二六	一〇、五〇〇	二	八糎	一五糎	二	不明	明治二元	英國	英國ホーソンレスリー社	佐世保工廠	九、一〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
駒橋	六四・〇	一〇・六七五	八、六五	一、二五〇	二、九	十四糎	八糎高角	二	不明	大正元、一〇	不明	大正元、一〇	英國	英國ホーソンレスリー社	佐世保工廠	九、一〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
迅鯨	二五・八	二六・九	一、二五〇	二、九	十四糎	八糎高角	一	不明	大正元、一〇	不明	大正元、一〇	英國	英國ホーソンレスリー社	佐世保工廠	九、一〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
長鯨	〃	〃	八、五〇〇	二六	同右	四機銃	二	不明	大正元、一〇	不明	大正元、一〇	英國	英國ホーソンレスリー社	佐世保工廠	九、一〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

敷設艦

敷設艦　計三隻

宮磐	二四四・三六	二〇・四五七	四四	九、八五二・二五	二	八糎高角	一	不明	明治三二、一	英國	英國アームストロング社	淺間	二四四・三六	二〇・四五七	四四	九、八五二・二五	二	八糎高角	一	不明	明治三二、一	英國	英國アームストロング社
阿蘇	二六・七九	一七・六四五	六、八	七、八〇〇	三	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、七	英國	獨逸ヴルカン社	八雲	二四四・三六	二〇・四五七	四四	九、六四五	二	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、七	英國	獨逸ヴルカン社
勝力	七三・一五	二一・八九四	一、一	二、〇〇〇	二	八糎十二糎	一	不明	明治三二、六	英國	佛國フォルジエーシャンラル社	吾妻	二三一・三五	一四七・二二	九、二七七	〃	同右	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、六	英國	佛國ロアール社
												出雲	二二一・〇	二〇・九三七	九、八三六	二〇・七五	二	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、九	英國	英國アームストロング社
												磐手	〃	〃	〃	〃	同右	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、一二	英國	同右
												春日	二〇四・八	八一・九〇七	七、七〇〇	二〇	同一五糎	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、一〇	英國	同右
												日進	〃	〃	〃	〃	同右	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、一〇	英國	同右

等海防艦

一等海防艦　計七隻

淺間	二二四・三六	二〇・四五七	四四	九、八五二・二五	二	八糎高角	一	不明	明治三二、一	英國	英國アームストロング社													
八雲	二二四・三六	二〇・四五七	四四	九、六四五	二	八糎十五糎	一	不明	明治三二、七	英國	獨逸ヴルカン社													
吾妻	二三一・三五	一四七・二二	九、二七七	〃	同右	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、六	英國	佛國ロアール社													
出雲	二二一・〇	二〇・九三七	九、八三六	二〇・七五	二	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、九	英國	英國アームストロング社													
磐手	〃	〃	〃	〃	同右	八糎二十糎高角	一	不明	明治三二、一二	英國	同右													
春日	二〇四・八	八一・九〇七	七、七〇〇	二〇	同一五糎	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、一〇	英國	同右													
日進	〃	〃	〃	〃	同右	八糎十五糎高角	一	不明	明治三二、一〇	英國	同右													

一等海防艦　計七隻

二等海防艦

二等海防艦　計二隻

浦塩	二〇三・九	二四二・一八四	八八	九、一六	二	八糎	二五糎	二	不明	明治二九、一〇	不明	明治三一、三	伊國トリエスト											
對馬	一〇二・〇	一二・四四四	四・九〇	三五、四三〇	二〇	十五糎八糎高角	一六	八糎		三五、一三		三五、一〇	吳造船廠											

二等海防艦　計二隻

一等砲艦

一等砲艦　計二隻

淀	八五・三四	九・六八	三、三五	一、四五〇	三	十二糎	八糎	二	不明	明治二九、一〇	不明	明治三一、三	英國											
安宅	六七・六七	九・六五	二・九	八五〇	六	十二糎	十二糎	二	不明	明治四〇、一二 大正一、一四	不明	明治四〇、一二 大正一、一四	英國											

一等砲艦　計二隻

二等砲艦

二等砲艦　計十一隻

宇治	八四・二・一一	八・四	三五、八	六〇	一五	八糎	一五糎	二	不明	明治二九、一〇	不明	明治三一、三	英國											
岡田	四四・一〇	七・三〇・六一	三五、一二	一二六	〃	六糎	二機銃	四	不明	明治三一、九	不明	明治三一、九	英國											
伏見	四八・七七	七・四七〇・六九	三五、八	一八〇	同	〃	〃	〃	不明	明治三一、六	不明	明治三一、六	英國											
鳥羽	五四・八六	八・二三〇・七九	三五、一〇	二三〇	一五	八糎	二機銃	六	不明	明治三一、七	不明	明治三一、七	英國											
嵯峨	六三・九五	八・九二・二一	四四、一二	七八〇	〃	〃	一八糎二機銃	三	不明	明治三一、九	不明	明治三一、九	英國											
勢多	四四・八六	八・三三・〇三	四四、一二	三三八	一六	八糎	十二糎一機銃	六	不明	明治三一、一一	不明	明治三一、一一	英國											
堅田	〃	〃	大正元、一〇	〃	〃	〃	〃	〃	不明	明治三一、一二	不明	明治三一、一二	英國											
比良	〃	〃	大正二、四	〃	〃	〃	〃	〃	不明	明治三一、一二	不明	明治三一、一二	英國											
保津	〃	〃	大正二、四	〃	〃	〃	〃	〃	不明	明治三一、一二	不明	明治三一、一二	英國											
熱海	〃	〃	大正二、四	〃	〃	〃	〃	〃	不明	明治三一、一二	不明	明治三一、一二	英國											
二見	〃	〃	大正二、四	〃	〃	〃	〃	〃	不明	明治三一、一二	不明	明治三一、一二	英國											

二等砲艦　計十一隻

總計　七六隻

內未成　九隻

內未成　二隻

第二表

帝國艦艇一覽表

昭和三年九月三十日調

驅逐艦ノ部

艦種	艦名	垂線間の長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備砲	發射管	起工	竣工	製造所
		米	米	米	トン	節			年月	年月	
一等驅逐艦	海風	九四・四九	八・三六	二・七四	一、一五〇	三八	十二糎 五	四	明治四三・一	四四・九	舞鶴工廠
	山風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	浦風	八三・九〇	八・一一	二・四四	九〇七	三四	十二糎 四	〃	四三・六	四四・一〇	三菱長崎造船所
	磯風	九四・四九	八・三三	二・七三	一、一三七	三四	十二糎 四	〃	大正四・一二	大正四・一〇	英國ヤーロー社
	濱風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	天津風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	呉工廠
	時津風	九七・五四	八・八四	二・九〇	一、三〇〇	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	三菱長崎造船所
	江風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	谷風	〃	八・九二	二・九〇	一、三四五	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	舞鶴工廠
	峯風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	澤風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	沖風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	島風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	離風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	矢風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	羽風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	沙風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	秋風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	夕風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	太刀風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	帆風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	野風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	波風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	旗風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	追風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	松風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	春風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	朝風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	神風	九四・一四	九・一四	二・九二	一、四〇〇	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	舞鶴工廠
	旭風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	波風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	野風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	帆風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	太刀風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	夕風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	秋風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	沙風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	羽風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	矢風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	離風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	島風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	沖風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	澤風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	峯風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	谷風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	江風	九七・五四	八・八四	二・九〇	一、三〇〇	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	舞鶴工廠
	時津風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	天津風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	濱風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	磯風	九四・四九	八・三三	二・七三	一、三三七	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	三菱長崎造船所
	浦風	八三・九〇	八・一一	二・四四	九〇七	三四	十二糎 四	〃	四三・六	四四・一〇	三菱長崎造船所
	山風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大正四・一二	大正四・一〇	英國ヤーロー社
	海風	九四・四九	八・三六	二・七四	一、一五〇	三八	十二糎 五	四	明治四三・一	四四・九	舞鶴工廠
駆逐艦	朝凪	八三・九〇	八・一一	二・四四	九〇七	三四	十二糎 四	〃	四三・六	四四・一〇	三菱長崎造船所
	夕凪	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大正四・一二	大正四・一〇	英國ヤーロー社
	追風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	疾風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	呉工廠
	突風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	朝風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	早風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	夕風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	陸風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	如月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	丁風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	生風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	弥風	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	卯月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	皐月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	水無月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	文月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	長月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	菊月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	三日月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	望月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	夕月	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	吹雪	九七・五四	八・八四	二・九〇	一、三〇〇	三四	十二糎 四	〃	四三・一〇	四四・九	舞鶴工廠
	白雪	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	初雪	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	深雪	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	叢雲	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	東雲	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	薄雲	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	白雲	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	磯波	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	綾波	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一等驅逐艦計　六十九隻
内未成　二十隻
（外十四隻トモ）

艦名	垂線間の長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備砲	發射管	起工	竣工	製造所
	米	米	米	トン	節			年月	年月	
櫻	九七・二五	八・三四	二・七四	一、一五〇	三八	十二糎 五	四	明治四三・一	四四・九	舞鶴工廠
楓	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
橘	七・三一	八・一一	二・四四	九〇七	三四	十二糎 四	〃	四三・六	四四・一〇	三菱長崎造船所
柳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大正四・一二	大正四・一〇	英國ヤーロー社
樫	二・二二	八・三三	二・七三	一、三三七	三四	十二糎 四	〃	〃	〃	呉工廠
槇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
欅	六六・五〇	八・一一	二・四四	九〇七	三四	十二糎 四	〃	四三・六	四四・一〇	三菱長崎造船所
樅	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大正四・一二	大正四・一〇	英國ヤーロー社
楡	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
檜	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	呉工廠
楠	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
楓	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
柳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
樺	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
桐	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
楢	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
柏	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
桂	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

艦

艦名	月日	噸数	馬力	速力	製造所	備考
浦波	大正十四、三、二五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	石川島造船所	
磯波	〃十四、六、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	舞鶴工作部	
白露	〃十四、八、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	佐世保工廠	
海霧	〃十四、一〇、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	浦賀船渠會社	
東雲	〃十五、三、一三	一、三四〇	二、四〇〇	三四	藤永田造船所	
霧雲	〃十五、六、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	舞鶴工作部	
深雪	昭二、三、一	一、三四〇	二、四〇〇	三四	横濱船渠會社	
初雪	〃二、三、一四	一、三四〇	二、四〇〇	三四	藤永田造船所	
白雪	〃二、六、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	佐世保工廠	
吹雪	〃二、六、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	石川島造船所	
夕月	〃二、七、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	浦賀船渠會社	
望月	〃二、八、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	藤永田造船所	
三日月	〃二、九、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	舞鶴工作部	
菊月	〃二、一〇、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	佐世保工廠	
長月	〃二、一一、一五	一、三四〇	二、四〇〇	三四	舞鶴工作部	

一等驅逐艦計　六十九隻　内未成　二十隻　（外十四隻トモ）

艦

艦名	月日	噸数	馬力	速力	製造所	備考
櫻	明治四四、三、一三	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	十二艘建造
橘	〃四四、一二、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	横須賀工廠	同
楓	大正三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
榊	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
桂	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	吳工廠	同
梅	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	神戸川崎造船所	同
楠	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	三菱長崎造船所	同
柏	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	同	同
松	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	大阪鐵工所	同
杉	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	浦賀船渠會社	同
桐	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	十二艘建造
樫	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
檜	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
柳	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
楡	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
槇	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	浦賀船渠會社	同
椿	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
樅	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
楓	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
榎	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	横須賀工廠	同
樺	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	横須賀工廠	同
欅	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
櫻	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同

艦

艦名	月日	噸数	馬力	速力	製造所	備考
桃	大正三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	十二艘建造
桐	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
杉	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	浦賀船渠會社	同
松	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
柏	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
楠	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
梅	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
桂	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	横須賀工廠	同
楓	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	横須賀工廠	同
榊	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	佐世保工廠	同
樺	〃三、三、一	一、三五〇	二、七〇〇	三四	舞鶴工廠	同
橘

第二表

帝國艦艇一覽表

昭和三年九月二十日調

艦艇ノ部

艦名	艦種	艦籍	進水	竣工	排水量	最大幅	平均吃水	速力	備考
第一號掃海艇	掃海艇	横須賀	大正二、三	大正二、三	七〇〇トン	八・〇三米	二・二九米	一〇節	十二糎八機高角一門
第二號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第三號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第四號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第五號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第六號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十一號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十二號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第八號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第七號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第九號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃

計十二隻　内未成二隻

艦名	艦種	艦籍	進水	竣工	排水量	最大幅	平均吃水	速力	備考
第一號掃海艇	掃海艇	横須賀	大正二、三	大正二、三	七〇〇トン	八・〇三米	二・二九米	一〇節	十二糎八機高角一門
第二號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第三號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第四號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第五號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第六號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十一號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第十二號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第八號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第七號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃
第九號掃海艇	〃	〃	二、三	二、三	〃	〃	〃	〃	〃

計十二隻　内未成二隻

帝國艦艇一覽表

艦艇ノ部

昭和三年九月二十日調

帝國鐵鑛一覽表

調製　鑛業警察課

昭和三年六月三十日調

| 鑛業所名 | 鑛區名 | 所在地 | 鑛業權者住所 | 鑛業權者氏名 | 鑛業權ノ種類 | 鑛業權ノ存續期間 | 鑛業權ノ設定又ハ移轉ノ年月日 | 鑛業權ノ設定又ハ移轉ノ登録番號 | 鑛區ノ面積 | 鑛區ノ境界 | 鑛床ノ種類 | 鑛床ノ狀況 | 鑛床ノ走向 | 鑛床ノ傾斜 | 鑛床ノ厚サ | 鑛床ノ深サ | 鑛床ノ延長 | 鑛床ノ品位 | 鑛床ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ埋藏量 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ方法 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ程度 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ年月日 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ登録番號 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ面積 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ境界 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ種類 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ狀況 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ走向 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ傾斜 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ厚サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ深サ | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ延長 | 鑛床ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ採掘ノ品位 | 鑛床ノ採掘

第四表

帝國艦艇一覽表

昭和三年九月三十日調

潛水艦ノ部

| 艦種 | 艦名 | 長 | 幅 | 吃水 | 排水量 | 速力 水上 | 速力 水上 | 速力 水上

×伊號第六十五
×伊號第六十六
×伊號第六十七

（×印未成）一等潜水艦　計二十六隻

内未成　十四隻

二等潜水艦

呂號第一	六三・六八	四・一九	六八九	一三						三六	一	大正八	神戸川崎造船所
呂號第二	〃	〃	〃	一八						〃	〃	〃	〃
呂號第三	〃	四・〇二	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十一	六九・一九	六・三五	三・四三	七二〇						〃	一	〃	呉工廠
呂號第十二	〃	〃	三・六八	七四〇						〃	〃	〃	〃
呂號第十三	七〇・一〇	六・一〇	三・六八	七四〇	一七					〃	〃	〃	〃
呂號第十四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十六	〃	六・一三	三・七〇	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十七	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十八	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第十九	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十一	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十二	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十三	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十六	七四・二三	〃	〃	七五〇	一六					〃	〃	〃	〃
呂號第二十七	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十八	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第二十九	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第三十	〃	〃	〃	六六五	一三					〃	〃	〃	〃
呂號第三十一	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第三十二	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十一	七〇・五九	七・一六	三・八九	九〇〇	一七					〃	〃	〃	〃
呂號第五十二	〃	〃	三・九四	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十三	〃	〃	三・九六	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十六	七六・二〇	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十七	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十八	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第五十九	〃	七・一八	三・七七	九九八	一六					〃	〃	〃	〃
呂號第六十	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十一	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十二	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十三	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十六	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十七	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
呂號第六十八	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃

（×印未成）二等潜水艦　計四十五隻

三等潜水艦

波號第一	四一・三三	三・四三	二八六	一三						二	一	明治四一	英國
波號第二	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
波號第三	〃	〃	二九二	〃						〃	〃	〃	〃
波號第四	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
波號第五	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
波號第六	三八・六三	三・〇五	三〇四	一〇						〃	〃	〃	〃
波號第七	四一・〇五	三・一四	二九〇	一三						〃	〃	〃	〃
波號第八	〃	〃	〃	〃						〃	〃	〃	〃
波號第九	三八・六〇	三・一八	四八〇	一三						〃	〃	〃	〃
波號第十	三八・七四	三・二二	四五〇	一七						〃	〃	〃	〃

潜水艦　合計八十一隻

内未成　十四隻

三等潜水艦　計十隻

帝國艦艇一覽表

特務艦ノ部

艦種	艦名	長	最大幅	平均吃水	排水量	速力	備砲	起工年月	進水年月	竣工年月	製造所
練習特務艦	○朝日	一三、一〇米	二、九四米	六、九三米	二一、一四トン	一八、二節	一五糎二	明治三〇、一〇	明治三一、三	明治三一、七	英國ジョン・ブラウン社
同	○敷島	一三、九二	二三、〇一	六、六〇	二一、九八六	一八、六	一五糎二	三〇、三	三一、一二	三一、一二	英國テームス社
同	○富士	一二四、〇〇	二三、二五	六、六六	九、八九〇	一八、八/一四	一五糎二	二七、八	二九、三	三〇、八	テームス鐵工所
標的艦	○摂津	一三二、四〇	二三二、六〇	七、〇九	一七、三一〇	一三	八糎四	一六、一二	一八、三	二〇、二	小野濱造船所
測量艦	大和	〃	〃	〃	二、三五〇	〃	八糎四	一六、一二	一八、三	二〇、二	小野濱造船所
同	松江	七二、二四	一〇、〇	四、二七	二、三五〇	一〇、三	一五糎二	二七、八	二九、三	三〇、八	テームス鐵工所
同	鵜飼	七六、九六	一一、〇二	三、七三	二、二七〇	一〇、三	八糎二	二七、八	二九、三	三〇、八	テームス鐵工所
運送艦	高崎	一一四、〇〇	一四、六一	四、八〇	五、九八七	一〇	同	二七、八	二九、三	三〇、八	テームス鐵工所
同	青島	七三、六九	一三、〇六	六、六二	八、三〇〇	一〇	同	二七、八	二九、三	三〇、八	獨國
同	劍埼	六四、〇一	九、四五	四、二七	一、九七〇	九	同	大正元、一	二、三	三、八	英國クラス、ゴー
同	洲埼	一三一、九二	一三、二四	七、〇二	九、八〇〇	一四	十二糎二	六、二	六、六	七、九	吳工廠
同	室戸	一〇五、一六	一三、二四	七、二九	八、七五二	一二	十二糎二	六、二	六、六	七、九	横須賀工廠
同	野島	〃	〃	〃	〃	〃	〃	六、二	七、一〇	七、一二	三菱神戸造船所
同	能登呂	一三八、六八	一七、六八	八、〇八	一五、四〇〇	一三	一二糎二	八、一二	九、二	九、三	神戸川崎造船所
同	知床	〃	〃	〃	〃	〃	〃	九、二	九、七	九、九	同
同	襟裳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	九、三	九、七	九、九	同
同	佐多	〃	〃	〃	〃	〃	一四糎二	九、三	九、七	九、九	同
同	鵜見	〃	〃	〃	〃	〃	〃	九、三	九、七	九、九	同
同	尻矢	〃	〃	〃	〃	〃	〃	九、三	九、七	九、九	同
同	石廊	〃	〃	〃	〃	〃	〃	九、三	九、七	九、九	同
同	神威	一五一、一八	二〇、四二	八、四三	一九、三〇〇	一四	同	一〇、三	一一、三	一一、五	橫濱船渠會社
同	鳴戸	〃	〃	〃	一七、五〇〇	一四	同	一〇、三	一一、三	一一、五	同
同	早鞆	〃	〃	〃	二、八三〇	一二	同	一〇、三	一一、三	一一、五	同
同	陸戸	一三八、六八	一七、六八	八、〇八	一五、四〇〇	一三	同	一〇、三	一一、三	一一、五	同
同	間宮	一四四、七八	一八、五九	八、四三	一七、五〇〇	一四	同	一〇、三	一一、三	一一、五	同
同	鳴戸	〃	〃	〃	二、八三〇	一二	同	一〇、三	一一、三	一一、五	同
砕氷艦	大泊	六〇、九六	一三五、二四	六、四〇	二、八三〇	一三	八糎一	一〇、六	一一、一〇	一一、一二	神戸川崎造船所

合計二六隻

（註）○符ハ軍備制限條約ノ規定ニ依リ戰闘任務ニ堪ヘサルモノト認メ保有シ得タルモノ

帝國艦艇一覽表

潜水艦ノ部

昭和三年九月三十日調

華府協約海軍制限一覧表

種別 / 國別		英	米	佛	伊
主力艦	合計噸數（噸）	五五〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	一七五、〇〇〇	一七五、〇〇〇
	各艦基準排水量（噸）	三五、〇〇〇噸ヲ超エルヲ得ス			
	備考	口徑二六吋（一四吋砲ニ換算）ヲ超エル砲ヲ備フルヲ得ス			
航空母艦	合計噸數（噸）	一三五、〇〇〇	一三五、〇〇〇	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
	各艦基準排水量（噸）	二七、〇〇〇噸ヲ超エルヲ得ス 但シ（一）合計噸數ノ範圍内ニテ三、〇〇〇噸ヲ超エサル噸數ノ二隻ヲ限リ建造スルコトヲ得 （二）協約ニヨリ廢棄セラルヘキ主力艦ヲ之ニ轉用スルコトヲ得			
	備考	（一）口徑八吋ヲ超エルヲ得ス （二）口徑六吋ヲ超エル備砲アル時ハ五吋ヲ超エル砲數合計十門以内トス 但シ噸數三、〇〇〇噸以上ノ航空母艦ニ於テハ八門以内トス			
その他の補助艦	合計噸數（噸）	制限ナシ			
	各艦基準排水量（噸）	一〇、〇〇〇噸ヲ超エルヲ得ス			
	備考	口徑八吋ヲ超エルヲ得ス			

帝國艦艇一覽表

昭和三年八月三十日調

艦種	艦名	艦齢	排水量	速力	備考
戰艦	陸奥	一七・六	三三、八〇〇	二三・〇	
〃	長門	一七・六	三三、八〇〇	二三・〇	
〃	日向	一六・〇	三一、二〇〇	二三・〇	
〃	伊勢	一六・〇	三一、二〇〇	二三・〇	
〃	扶桑	一六・〇	三〇、七〇〇	二三・〇	
〃	山城	一六・〇	三〇、七〇〇	二三・〇	
〃	金剛	一四・〇	二七、五〇〇	二六・〇	
〃	比叡	一四・〇	二七、五〇〇	二六・〇	
〃	榛名	一四・〇	二七、五〇〇	二六・〇	
〃	霧島	一四・〇	二七、五〇〇	二六・〇	
巡洋戰艦	高雄	一四・〇	三一、二〇〇	三三・〇	
〃	愛宕	一四・〇	三一、二〇〇	三三・〇	
〃	鳥海	一四・〇	三一、二〇〇	三三・〇	
〃	摩耶	一四・〇	三一、二〇〇	三三・〇	
巡洋艦	妙高	一四・〇	一三、九〇〇	三五・五	
〃	那智	一四・〇	一三、九〇〇	三五・五	
〃	足柄	一四・〇	一三、九〇〇	三五・五	
〃	羽黒	一四・〇	一三、九〇〇	三五・五	
〃	神通	一四・〇	五、五〇〇	三三・〇	
〃	那珂	一四・〇	五、五〇〇	三三・〇	
〃	夕張	一四・〇	三、一〇〇	二九・〇	
〃	五十鈴	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	名取	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	由良	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	鬼怒	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	阿武隈	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	球磨	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	多摩	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	木曾	一四・〇	五、一〇〇	三三・〇	
〃	長良	一四・〇	五、一〇〇	三三

海軍大佐廣瀬彦太著

潜水艦 独逸 獲物を探めて

四六版二百三十八頁
挿畫數葉頗る美本
定價一圓
送料十錢

潜水艦大活躍の眞相

（目次大要）

（一）出動。（二）第一彈。（三）夜間の航行。（四）危機一髪。（五）軍馬輸送。（六）重圍に陷る。（七）獲物澤山。（八）海底の一夜。（九）機雷敷設面の突破。（十）命拾ひ。（十一）敵の網にかゝる。（十二）長い間敵に追尾せらる。（十三）英國の赤十字旗濫用。（十四）壯快なる襲。（十五）巧言令色の佛人。（十六）英國産ブルドックとの闘爭。（十七）最後の暴風雨。（十八）歸港……等々附錄として『潜水艦問答』あり。

頁毎に迫り來る潜水艦の大活躍は、讀む者をして手に汗せしめるのみか、潜水艦生活の眞諦にふれて、偉大なるこれら乘組員の凄壯極りなき大氣魄に深く感じ自ら涙の流るゝを覺えるであらう。福田少將著『潜水艦の話』と併せて愛讀あらんことを願ひます

東京市麹町區六ノ一
海軍研究社
振替東京七〇六三番
電話銀座三一九二番

海軍制度一覽表

國名	種類	噸數	速力	備砲	魚雷發射管	乘組員	建造費	建造年數	備考
英	水量（噸）合計								
	主力艦	三五、〇〇〇	二五	一三五糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
米	水量（噸）合計								
	主力艦	三二、〇〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
日	水量（噸）合計								
	主力艦	三二、〇〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
佛	水量（噸）合計								
	主力艦	二三、五〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
伊	水量（噸）合計								
	主力艦	二三、五〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
露	水量（噸）合計								
	主力艦	二三、五〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
其他	水量（噸）合計								
	主力艦	二三、五〇〇	二一	一四糎砲八門		一、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇圓	四	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ四年ヲ標準トス
	巡洋艦	一〇、〇〇〇	三〇	一五糎砲八門	四	七〇〇	一、五〇〇、〇〇〇圓	三	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ三年ヲ標準トス
	驅逐艦	一、三五〇	三五	一二糎砲四門	四	一二〇	一五〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス
	潜水艦	八〇〇	一五	一二糎砲二門	四	四〇	一〇〇、〇〇〇圓	二	一隻ヲ建造スルニ要スル期間ハ二年ヲ標準トス

（一）合衆國ノ主力艦ハ一四糎砲ヲ備フルモノ多シ
（二）英國ノ巡洋艦ハ一五糎砲八門ヲ備フルモノ多シ
（三）佛國ノ巡洋艦ハ一五糎砲八門ヲ備フルモノ多シ
（四）伊國ノ巡洋艦ハ一五糎砲八門ヲ備フルモノ多シ
（五）露國ノ巡洋艦ハ一五糎砲八門ヲ備フルモノ多シ
（六）其他ノ諸國ハ略ボ同一ナリ

海軍軍令部長　鈴木海軍大將閣下題字
海軍省教育局長　末次海軍中將閣下序文
海軍少將　福田一郎閣下著

潜水艦の話

（本文目次は非常に多いのでとても書き切れぬから茲には省略する）

兎に角潜水艦に關するあらゆる事柄は本書によつて全部知ることが出來る。珠に挿入せられたる百六十に餘る寫眞類は又と得難い貴重なもの、珍奇なものばかりで、これだけの寫眞を集め得たことの一事でも、實に偉觀に値するのである。

著者は我海軍にて潜水艦創建以來、或は潜水艦々長として、或は潜水隊司令として多年斯界の向上發展に努力せられ自ら多大の研究と體驗を持たれる現今唯一の權威であります

本書が一度發行せられるや、初版は直ちに賣切れ、只今再版であります。

是を以て見ても如何に價値を認められてゐるかゞおわかりでせう。

定價三圓五十錢　送料十八錢

菊版體裁美麗上等紙
本文三百九十二頁
貴重寫眞百四十五圖
口繪アート寫眞十八枚
グラビヤ版五葉

東京市内麹町区一ノ六　海軍研究社
振替東京七〇七六三番　電話銀座三一九二番

海軍少將　日高謹爾著

ジユトランド海戰の研究

全二冊（本書・別冊）
定價四圓八十錢
郵稅十八錢

有名な日高少將が十年の歳月を費やして漸う書き下ろされた貴重な書物です、内容は改めて申上げませんが、彼の世界に嚆の高いジユトランドの大海戰であり、此海戰は實に、英國は總艦艇を擧げて獨海軍に當り、獨逸は又總艦艇を以て之に對抗した花々しい歐洲大戰中の大海戰であります。日沒に及んでこの戰は幕を下したが、勝敗いづれともつかず互に秘術を盡して相闘つたのであります。其雄大な大海戰は筆者の筆によつて遺憾なく現はれて居ります。

近世海戰史の精髄　一

本書は二部よりなり、一部は本書、一部は戰圖を九枚も收めた函であります。試みに此戰圖を机上に擴げて、自ら軍令部長となり、司令官となつて本書を讀まれたら興味又一段のことでせう、あへておすゝめ致します

東京市内麹町区一ノ六　海軍研究社
振替東京七〇七六三番　電話銀座三一九二番

海軍航空本部長　山本海軍中將題字
海軍少佐　尾崎主稅譯著（原著者　獨逸騎兵大尉リヒトホーフエン）

獨逸飛行將校 リヒトホーフエン 奮戰記

四六版二百二十頁
挿畫數葉入噸る美本
定價一圓
送料十錢

（目次大要）

リヒトホーフエン家。陸軍生徒。騎砲隊と成る。任官。大戰の勃發。露國侵入。佛獨西出征。銃火の洗禮。戰友ローエン。ヴエルダンの對陣。露女飛行。マツケンゼン軍附偵察將校。露國戰場の空中偵察。露國よりオスタンドへ複座機から雙發動機附戰闘機へ。祖國に捧ぐる一滴の精血。空中戰闘の初陣。シヤンパーニユの戰闘。勇士ベルケ。最初の單獨飛行。操縱術練習。操縱術檢定に合格す。ホルク伯の戰死。雷雨中の飛行。初めてフオツカー機を操縱す。露國戰場に於ける爆撃。戰闘機操縱の本望を達す。初めて英軍飛行機を射落す。ベルケの戰死。八番目の獲物。ホーカー少佐。遂に殊勳章を賜はる。小さき赤いもの。英佛飛行家の飛行振。予も亦射落さる。飛行家の冒險。初めて一日二回の戰闘。記錄を作つた日。愛犬モーリツツ。英軍飛行機獨軍飛行場を襲ふ。レニーフアー英獨兩軍戰線間に滯陸す。リヒトホーフエン攻撃團。阿父の來訪。鵬翼を縛て故郷に歸る。弟ローダー。狩獵家と屠殺者。野牛狩。歩兵飛行家、觀測飛行家及び偵察飛行家。獨軍飛行機。

歐洲戰場に於いて、敵機百臺を射落とし、空の怪物、空の鬼と迄謳はれ怖れしめたリヒトホーフエン大尉が、自ら筆をとつて戰死する間際まで書きつゞけた奮戰記である。一頁繰つたら面白くて一夜を讀み明かせる程痛快な本であります。

東京市麹町區内幸町一ノ六
海軍研究社
振替東京七〇七六三番
電話銀座三一九二番

昭和三年十二月十二日印刷
昭和三年十二月十九日發行　第一刷　定價壹圓五拾錢　郵稅十錢

海軍省軍事參事官及教育局員會檢閲濟
海軍省軍事參事官及教育局員會檢閲濟

不許複製

編輯　東京市麹町區内幸町一ノ六　海軍研究社
發行兼發行人　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地　橋本正雄
印刷人　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地　清水榮陸

印刷所　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地　常磐印刷株式會社

發行所　東京市麹町區内幸町一ノ六　海軍研究社
發賣所　東京市麹町區内幸町一ノ六（振替東京五二三九五番・電話銀座三一九二番）　帝國海軍社

586
1188